

及川晴香 木村書店

八戸ブックセンター5周年おめでとうございます。

まちの小さな本屋で働く書店員として、八戸ブックセンターの思い出というと真っ先に浮かぶのが秋に開催される「本のまち八戸ブックフェス」です。八戸まちなか広場マチニワ、八戸ポータルミュージアムはっちを会場として八戸ブックセンターが主催する年に一度の本のイベント。古本を売る人もいれば、軽食販売もあり、会場には気持ちの良い音楽が流れ、そして市内の新刊書店もブースを作り中心街に本の市が出現する、そんな日。

個人的にこのイベントの面白さは何といっても大きな川の流れるように歩く沢山のお客様に声をかけられることです。「みてっくださーい」「この本の表紙どうですか？」元気に話しかけると、足を止めてくれる人がいる。

「あなたはどこの本屋なの？」

「ちょうどいいから孫のプレゼントにする本を買っていこうかな」

「すぐそこで売ってるお菓子美味しかったから休憩時間に買うといいよ」

半分外にいるような開放感のあるマチニワでの、お客様とのこんなやり取りの中で人と人、人と本との色とりどりの「きっかけ」を感じます。自分の働く本屋を知ってもらきかけ、大切な人にプレゼントする本を見つけるきっかけ、売る側である自分も新しいお店に出会えるきっかけ。ブックフェスが開催される度、その輪の中にいられることを嬉しく感じます。

思えばこのイベントだけでなく、私個人としても八戸ブックセンターは「きっかけ」の地でした。ブックコーディネーターの内沼晋太郎さんを中心として市内の書店員が情報交換をする集まりでは、県外の特徴ある本屋の話や書店員同士の和気あいあいとした会話から多くの事を学びました。それは今の時代個々のお店がアピールできることとしてSNSで本紹介を発信するというポップ担としての活動のきっかけの一つに、また、オリジナルグッズを店頭で販売している八戸ブックセンターの「本を

売るだけではない」在り方は木村書店でもオリジナルのバッグやクッキーを販売するきっかけに、イラストレーターでもある森花子さんはデジタルイラストを作成する機器を紹介してくれ、ポップ担当の活動を広げるきっかけに、他店の書店員さんとのトークイベントにも参加させていただき、書店員の仕事そのものについて考える機会もいただきました。

この場所がイベントや企画、情報交換の場で創り出してくれたきっかけを生かしてこれから一緒に何ができるかを考えるとワクワクします。県内の作家さんによる青森の食材に対する食レポを食材と共に展示なんていうのも面白そうですし、来場客が作った青森の好きな場所のプチポップを大きな地図に貼り付け、最後にホームページで紹介するというのも見てみたい気がします。いずれも人が集まり、きっかけになる場である八戸ブックセンターだからこそできそうなこと。この先も八戸中心街という立地だけでなく、文化や人が集まるという意味での中心としてもここに在って欲しい、そう思います。

これからも八戸ブックセンターの「きっかけ力」を楽しみに、そしてこのまちに住み、働く一員として一緒に盛り上げてゆけることを楽しみにしています。

及川晴香 haruka oikawa

木村書店

本のまち八戸ブックフェス(2018~)

「本で旅をしよう」(2020)など

木村書店ポップ担当(ポップ担)。ジャンルを問わずおすすめの本に手描きのポップをつけ、本を購入するとポップも持ち帰ることができるようにしている。定休日を除き、ほぼ毎日おすすめ本と日記をツイッターで投稿しているのも人気。

